



産経ニュース

## 【正論】「総統選」以後 評論家・鳥居民

2008.3.27 03:10

### ■「民主的交代」中国への衝撃

22日の台湾の総統選挙で野党・国民党の馬英九氏が勝利を収めた。私は14日付の本欄で与党民進党の謝長廷氏の当選を予測すると述べた。そうならなかったことを私は残念に思っている。

さて、ここで論じるのは、政治指導者が交代することのできる台湾の民主的な政治システムに対して、中国共産党指導部はどのように立ち回ってきたか、そしてチベットとその周辺地域に起きている不穏な状況にかれらはどう対応できるのかということだ。

謝長廷氏に比べて、中国に対してより融和的な態度をとってきた馬英九氏の当選は、現在、世界中から批判と非難のただなかにある中国共産党の首脳たちにとって、大きなプレゼントになっている。だが、台湾のこの総統選は、中国共産党指導部が台湾の民主的な政治システムを争う余地のない事実として認めざるをえなくなり、傍観するしかなくなった結果であることをかれらは忘れてはいまい。

中国軍が台湾の高雄と基隆の沖合にミサイルを撃ち込んだことがある。12年前だ。1996年3月7日の深夜、中国軍は福建省永安近くの移動式発射台から台湾に向けて3発のミサイルを発射した。本欄の読者もミサイル恫喝(どうかつ)があったことを思いだし、アメリカは2隻の空母を台湾の近海に送ったのだ、中国側は李登輝氏を落選させようとしてミサイルを発射したのだと思い起こすことになる。

### 《戒厳令下の台湾が狙い》

多くの研究者がそのように説いてきたのだが、じつはその解釈は正しくない。

ミサイルを撃ち込んで、李登輝氏を落選させることはできなかった。中国共産党指導部もそれをはっきり予測できたことなのである。では、なぜ台湾海峡で数カ月にもわたる軍事演習をつづけ、ミサイルまで発射したのか。中国共産党指導部はつぎのように読んでいた。台湾人に脅しをかけ、恐慌状態にさせ、台湾のすべての株式を暴落させる。台湾の大金持ちから小金持ちまでが証券取引所の一時閉鎖を求め、戒厳令を布いてほしいと願うようにさせる。

中国軍の威圧がさらにつづく台湾の軍部を警戒させて、戒厳令を布くことを軍人たちも望むようになる。

そして世界最長の戒厳令下にあった台湾人は戒厳令に慣れているとも思ったはずだ。

共産党幹部の意図は、李登輝氏を落選させようとしたのではなかった。李氏が全台湾人が

ら選ばれた民主的な指導者となるのを阻止し、かれを専制体制の独裁者にしておこうとしたのである。

中国共産党は自分たちが独裁をつづけていくためには、腐敗と非道の歴史を持った国民党の独裁が台湾につづいているのだと人々を教化、宣伝したい。そこで台湾に再び戒厳令を布かせ、総統選挙を無期延期させようとして願ってこそ、ミサイルを撃ち込むことになったのである。

中国のその意図を挫(くじ)いたのは、アメリカの2隻の空母だったことは言うまでもない。

≪「ひ弱な超大国」≫

さて、中国共産党指導部は民主主義政体の台湾の存在が国内にどう影響するかと不安を抱きながらも座視せざるをえなくなった。だが、軍と警察を自由に使えるところでは、国内へ民主と自由の理念が入ってくるのを恐れ、香港人が民主的な方法で自分たちの代表を選ぶのを許さないし、チベット、新疆に「高度な自治」を与えようとしない。

アメリカの中国専門家、スーザン・シャーク女史がいみじくも言ったように、「ひ弱な超大国、中国」なのである。

だれもが知るように、胡錦濤氏はチベットの党委書記だったことが、そのあとのスピード出世の端緒となった。そのときの鉄兜(かぶと)姿のかれの新聞写真がある。1989年3月にラサに戒厳令を布いたときのものだ。

上海市党委書記の陳良宇氏は2年前に狙い撃ちされて、解任、投獄されたが、それより前、江沢民氏の後ろ盾があって、飛ぶ鳥を落とす勢いだったとき、胡錦濤総書記を何度かからかった。鉄兜が好きなのは、独裁者ムソリーニだったと陳氏は部下たちに演説し、坊主が1人2人死んだだけで、あのように騒ぎ立てると嘘(うそ)を交じえて嘲笑(ちょうしょう)した。

獄中の陳良宇氏に尋ねてみたい。1989年のチベットの騒乱から天安門事件がおきたときまでの中国の状況と比べて、現在の中国はずっと安定しているのだろうか、と。

胡錦濤氏は現在、自分が早急に取り組まなければならない重大な課題がいくつもあるのを承知している。かれはそれらのうちのいくつかでも解決することができるのだろうか。(とりいたみ)